

活躍する明専会員に聞く⑧

株式会社正興電機製作所 代表取締役社長

添田 英俊(制53)氏

聞き手・九州工業大学大学院工学研究院

電気電子工学研究系 准教授

小迫 雅裕(電電H9)



「情報と制御の独創技術で未来を創造する」と語る添田英俊社長

このシリーズでは、企業や団体のトップクラスで活躍中の明専会員に、明専会員がインタビューして、特に学生の皆さんや若手の方をターゲットトとして語っていただく企画です。第8回は、株式会社正興電機製作所の添田英俊社長に登場していただきます。

―制御工学科を選ばれた理由は？

当時国立大学で、制御工学の学科がめずらしく、新鮮に感じられました。入社当時より研究に携わることが考えておらず、「ものづくり」に関わる業界、例えば自動車に代表される輸送機器や電気機器といった製造業への就職率が高かったことが、制御工学を選んだ理由ですね。

―学生時代の思い出をお聞かせください。

卒論研究は山下研究室で歩行の停止時での実験を、私ともう一人の同僚と一緒に行いました。1977年当時、東芝のTOSBAC40(東芝発16ビットミニコン)が情報工学科で導入されていました。しかしながら当時、その利用者が多くほぼ夜中

にしか順番がまわってこなかったんですよ。プログラム読み込みはカード、実験データは紙テープ入力、紙テープに穴が開いていないところは、開け直して、悪戦苦闘していました。指導教員の山下教授からは、「君たちは日頃(日中)は見掛けないね」と皮肉たつぷりに言われました。「私たちは、昼間混んでいるTOSBACのおかげで夜中に研究をしています」と弁解していたのを覚えています。

―正興電機製作所を選ばれた理由は？

当社は、現在もそうですが当時、九州電力様、日立製作所様を中心に社会インフラ事業をやっている会社で、1つ目は「福岡の地元企業である事」、2つ目は「電力機器を中心にもものづくりの会社」、3つ目は「制御工学という専門分野が活かせる」以上の3つに加え、制御の先輩がいたことや地元国立大学出身を大切にしている会社だと聞き、総合的に判断し、就職先として選びました。

―会社経験についてご紹介ください。

九州工大出身は技術系というイ



浄水場監視制御システム

メージを破り、初めから自ら営業を選択しました。私の父をはじめ、親族が営業系で成功している人が多かったこともあり営業職を選択しましたが、やはり最初は苦労しました。私は、大半が公共分野や下水道の電気設備の責任者として対応させていたいただきましたが、主に担当した当時5億円未満であった売上を8億円近くまでに引き上げることに成功しました。制御で養った論理的思考力は、営業においても正しい戦略を選択するのにやはり重要だと感じています。

1 会社についてご紹介ください。

1921年電器商社として福岡市で創業し、2021年に創業100周年を迎えました。OT（制御技術）とIT（情報技術）とプロダクト技術の全てを兼ね添えていることが当社の強みであり、日立製作所様からの技術援助での電力会社様の変電所監視制御装置納入から、この技術を応用した官公庁の浄水場・污水处理場の監視制御装置納入に発展し、現在に至ります。札幌から沖縄の国内営業所および中国大連、北京、フィリピン、マレーシアの海外へ展開しています。

「サステナビリティ経営」を基本方針、「デジタルファースト」「脱炭素社会の実現」「One正興」を重点課題として、2022年を初年度、2026年を最終年度とした新中期経営計画を作成しました。

電力会社向けの監視制御システム、官公庁向け上下水監視制御システム、高速道路電源装置、産業会社向け受変電装置が主力事業です。

ICタグ・IoTセンサー・ARグラス・AIロボットを活用した設備遠隔監視・設備操作支援・設備巡視点検のDX事業、蓄電システム・



Net ZEB 古賀事業所設計棟

小水力発電システムによる脱炭素事業、自動車の窓の調光フィルムなどの新事業も展開しています。

100周年事業の一環として建設した古賀事業所の設計棟は省エネと太陽光パネルと当社製品の蓄電システムでCO₂排出ゼロのNet ZEB（ゼロエネルギービル）を実現、海外拠点まで含めたグループ全体で再エネ100%を目指しています。

運動管理、体調管理、カロリー管理、健康診断、ストレスチェック、保健指導等の健康経営支援ソフトを開発、全社員に配布したウェアラブル端末と連動した歩数競争の全社展

開で健康優良法人ホワイト50を取得、企業および自治体にも展開しています。

1 2018年に社長になられました、特に取り組まれていることは？

私どもは中期経営計画を立てていますが、その内容に私の取り組みを盛り込んでいます。基本方針として「サステナビリティ経営」を挙げ、重点項目として3つ挙げています。（戦略において、マーケットの追い風が吹いている分野に重点投資をする）

- 1、デジタルファースト（デジタル技術による社会課題の解決）
- 2、低炭素社会の実現（カーボンニュートラルへの取り組み）
- 3、One正興（グループ統合力の発揮）

次の100年に生き残る組織をつくることであり、とにかく組織にとって一番大切なのは「人」です。その「人」をいかに育てるのかに注力しています。3つの重要項目については、グループ横断プロジェクトを発足し、正興グループ全体（One正興）で、具体的な行動項目をあげて取り組んでいます。

インタビューシリーズ

—長年の会社経験の中で、特に思い出に残っていることなどがありましたらご紹介ください。

私が社長となり、基準最短の1年後に1部上場をめざし早々に準備に取り掛かったのですが、これも作業に入ることはインサイダー情報ということで上場時期を含め非公表にて進めましたので、社員のモチベーションを上げるのにも工夫を要しました。1部審査では2部上場審査事項以外の事項を中心に、特に中期計画、ガバナンス事項を重点に事前審査が行われました。中期計画では、各年度の予算および達成へ向けての確実性や創立100周年に向けて大きな目標を掲げていましたので、その実現性への具体的取り組み、コー



巡視点検口ロボット



2018年東京証券取引所一部上場

ポレートガバナンス・コードへの取り組み状況など、まだ不確実なところも多く説明には苦慮しました。最後に代表取締役への面談ということ、今後のビジネスモデル、事業拡大方針、コーポレート・ガバナンスの基本的な考え方、反社会的勢力の排除への取り組み等々を聞かれました。入社以来営業一筋で勤めあげてきましたが、この機会に改めて東証企業の一員としてしっかりと受けとめていかねばと再認識したところです。

—九州工大出身者は何名いますか？

工学部卒業29名、情報工学部卒業10名、私を含め、39名です。

所属は関係会社の社長2名、設計およびソフト設計です。

—学生や若い方へのアドバイスをお願いします。

私は今の会社に入社して、いつでも会社のドアから出て行く準備ができて「ドア後方」を目指して来ました。つまり、今所属する組織、会社でしか通用しない人材ではなく、どのような会社でも働けるプロフェッショナルになろうと努力していました。とはいえ、今はこの組織において働いている以上、ここにおいても一流になろうという意識は重要です。どの業界でも、どの会社でも通用するプロフェッショナルな実力を持つ「プロ」のレベルであれば、いつでもドアの外に出られます。そんな人材になれば、会社と自分の立場も対等なものとして考えられ、そうでなければ会社に「従属」しなくてはなりません。しかも、今の会社組織において、大変役に立つし、現実的には出世できると思います。



2022.6.15 本社会議室にて取材
小迫、寺司、添田

—最後になりますが、明専会にも一言お願いします。

九州工大生の活躍は、全卒業生にとっても大変喜ばしいことだと思います。そのために、明専会の果たす役割は大変重要です。それは、ビジネスに有効な情報交換であったり、学生にとって有効な就職の情報であったり、仕事においてガッツリ明専会ネットワークが活かせる、そんな明専会を目指してください。